

道南太平洋海域スケトウダラニュース

令和元年度 第2号 2019年12月6日

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構

函館水産試験場 調査研究部

TEL : 0138-83-2893 FAX : 0138-83-2849

令和元年度道南太平洋スケトウダラ産卵来遊群分布調査（2次調査）結果

函館水試調査船「金星丸」および釧路水試「北辰丸」により行われたスケトウダラ資源調査の結果をお知らせします。

- ・ 調査期間：2019年11月13～27日
- ・ 調査海域：道南太平洋の水深100～600mの海域

- ・ スケトウダラの海域平均反応量は、前年同期を下回った。
- ・ 魚群反応の比較的強い海域は登別沖。
- ・ スケトウダラ成魚とみられる魚群反応は、恵山沖を除き水深350～450mにかけて（恵山沖では水深400～500m）。
- ・ 水温は、渡島沖、胆振沖ともに平年よりもやや高い。とくに、渡島沖の水深50～220mにかけては、平年よりも1～2℃高い。

1. スケトウダラとみられる魚群は、渡島から日高海域にかけて観察されましたが、その中でも胆振沖の184、185漁区（登別沖；G～Hラインにかけて）にやや強い反応がありました（図1・2）。
2. 渡島から胆振にかけての平均反応量は、前年同期を下回り、金星丸による調査を開始した2001年度以降で最も低い値となりました（図3）。
3. スケトウダラ成魚とみられる魚群反応は、恵山沖を除き、水深350～450mに観察されました。なお、恵山沖ではやや深く、水深400～500mとなっていました（図2・4）。
4. トロールによる漁獲物調査の結果、新冠沖の水深360m付近で漁獲されたスケトウダラは、体長（尾叉長）30～50cmが主体となっていました（図5）。生物測定を行った結果、尾叉長40cm以上は、ほぼ成魚でしたが、40cm未満は未成魚が主体となっていました。なお、渡島沖では水深200m付近にも魚群反応が観察されましたが（図2-1）、トロール調査の結果、この反応はスケトウダラ未成魚（主に今年度生まれの0歳魚）が主体であることが分かりました。
5. 調査海域の水温は、渡島沖（南茅部沖）、胆振沖（登別沖）ともに、平年（2002～2018年度のこの調査における平均値）よりもやや高くなっていました。とくに、渡島沖の水深150～200mにかけての水温は、平年を2℃ほど上回っていました（図6）。気象庁のホームページによると（http://www.data.jma.go.jp/gmd/kaiyou/data/db/kaikyjo/jun/t100_HQ.html）、11月下旬の襟裳岬沖には、深さ200mで平年を5℃程度上回る10℃以上の水塊がみられており、噴火湾周辺の産卵場へ向かうスケトウダラ成魚の移動に影響を与えている可能性が考えられます。

なお、次回の調査は年明け後の1月中旬（2020年1月14～22日）を予定しています。調査後にまたスケトウダラニュースを発行して、分布状況等をお知らせします。

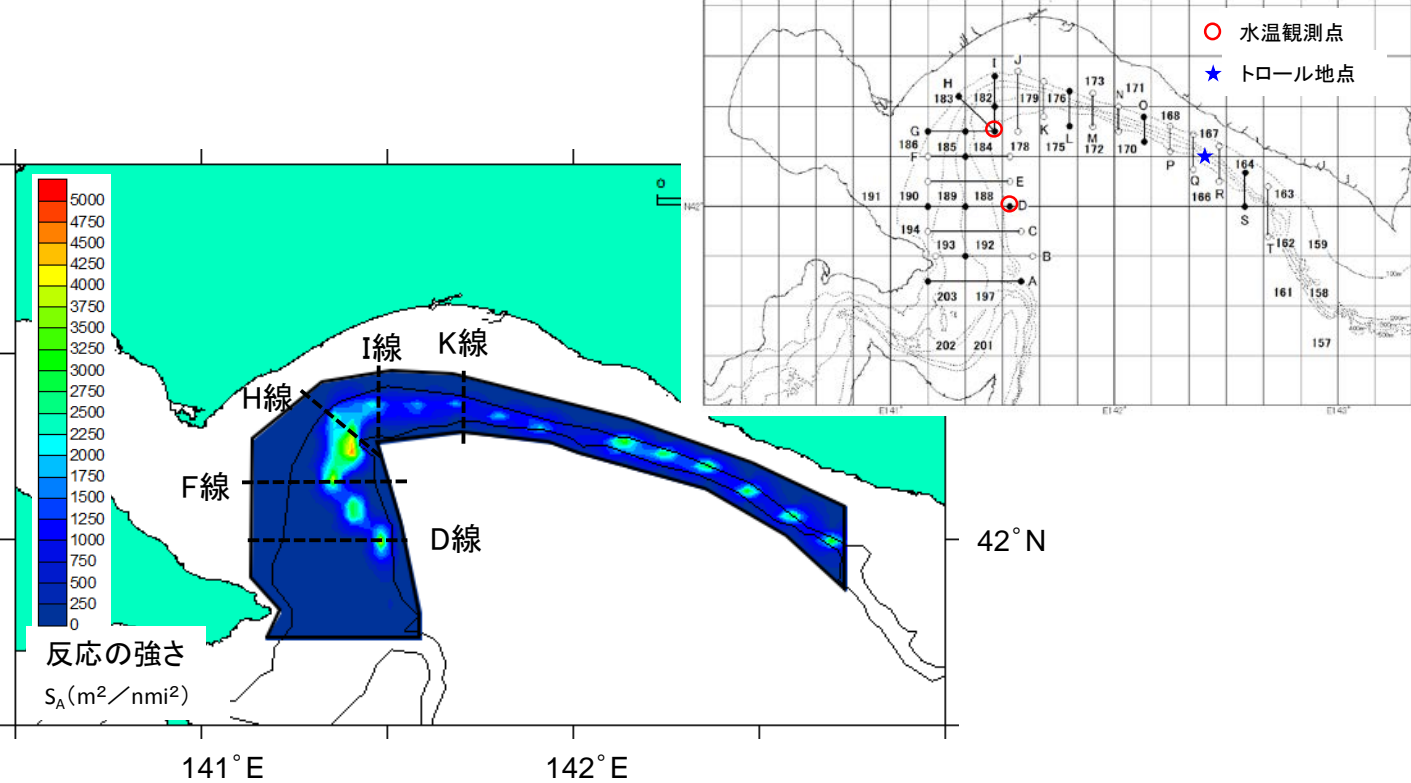


図1 調査海域における魚群の分布(右上図は調査海域図)

※図を見やすくするため、昨年度の図と比べ、カラーバーの表示範囲を変更しました。

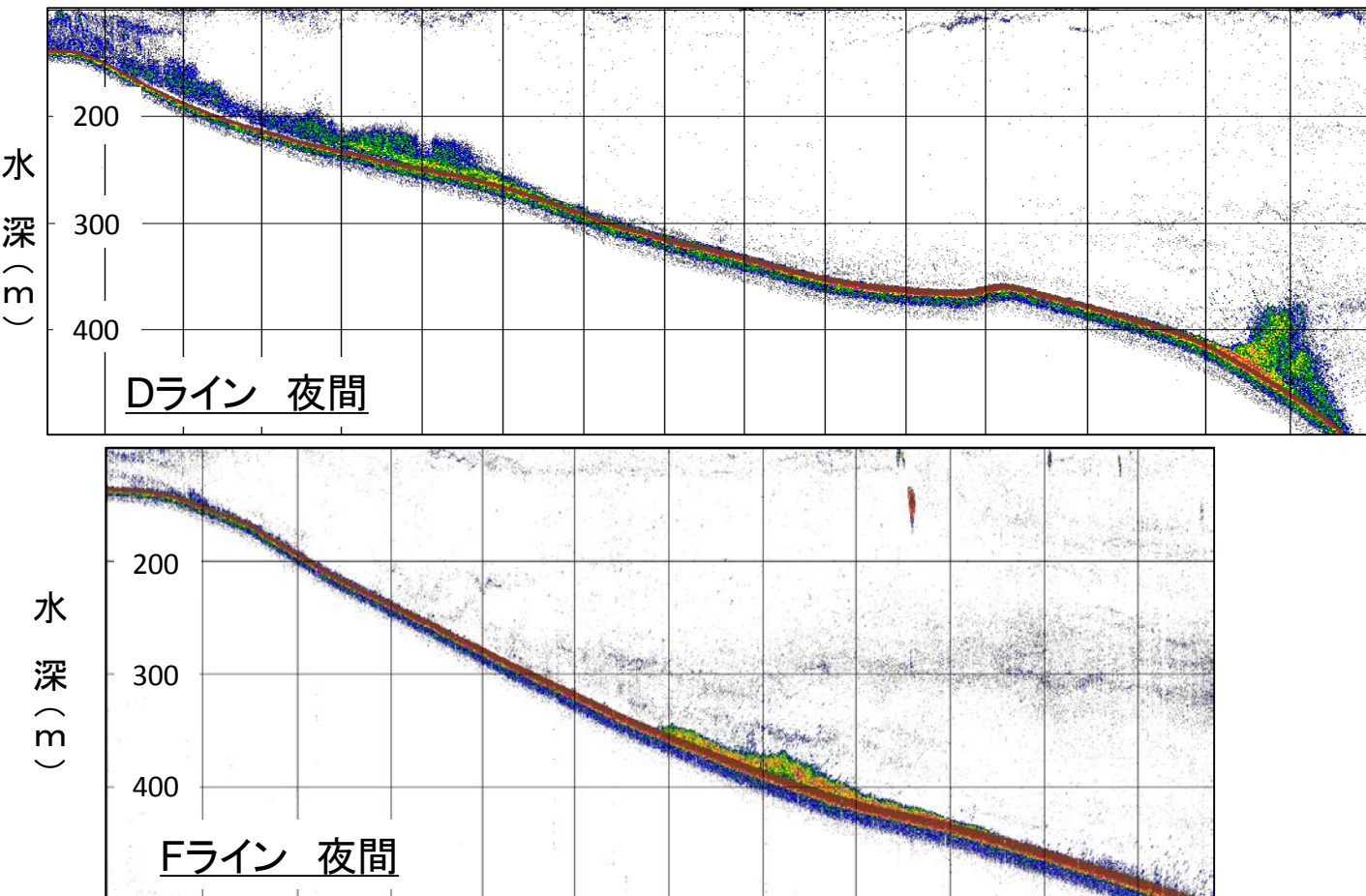


図2-1 魚群の分布状況(計量魚探画像)

グラフの水平ラインの間隔は1マイル, 鉛直ラインの間隔は100m

なお、水平ラインの間隔が異なるラインがあるのは、調査船の船速を変更したため。

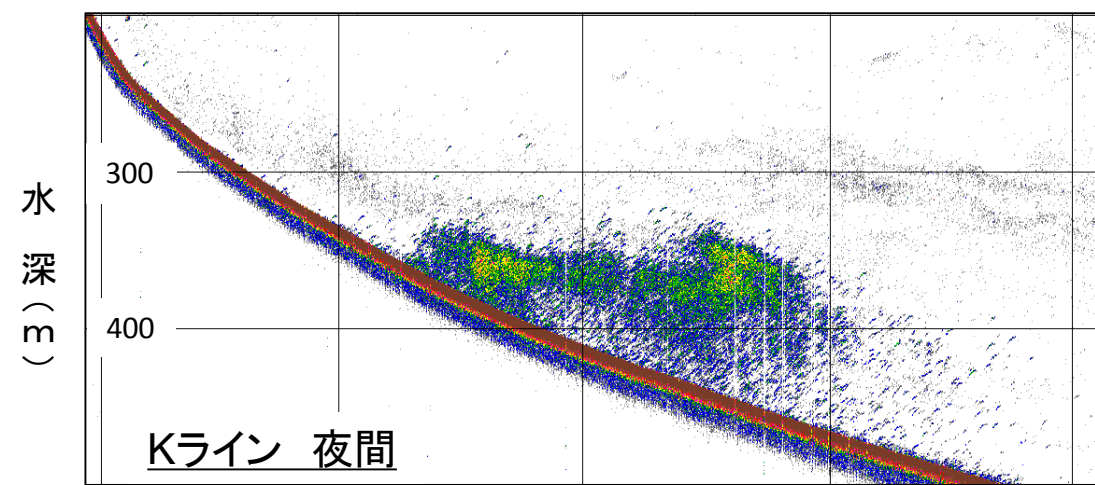
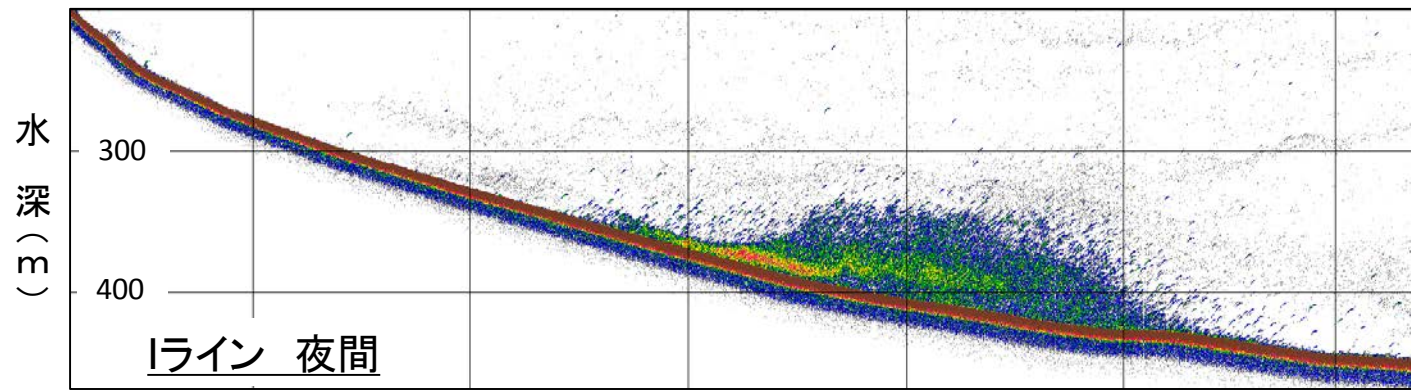
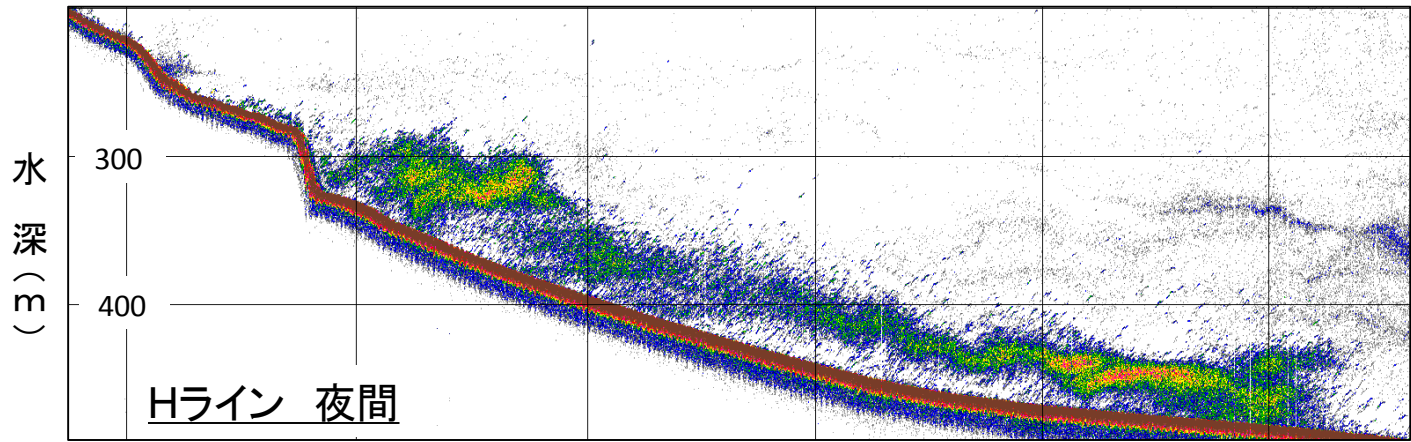


図2-2 魚群の分布状況(計量魚探画像)つづき
 グラフの水平ラインの間隔は1マイル, 鉛直ラインの間隔は100

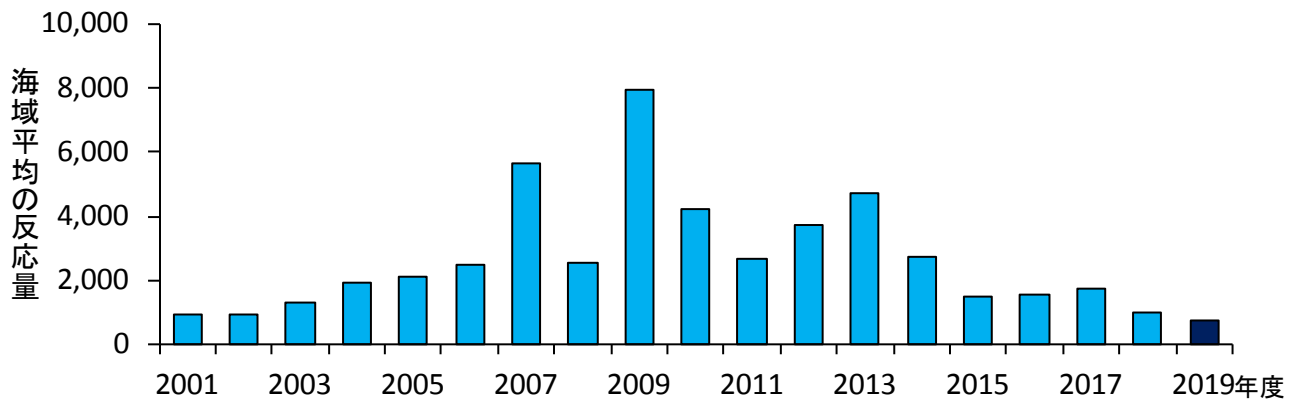


図3 調査海域におけるスケトウダラ魚探反応量の推移

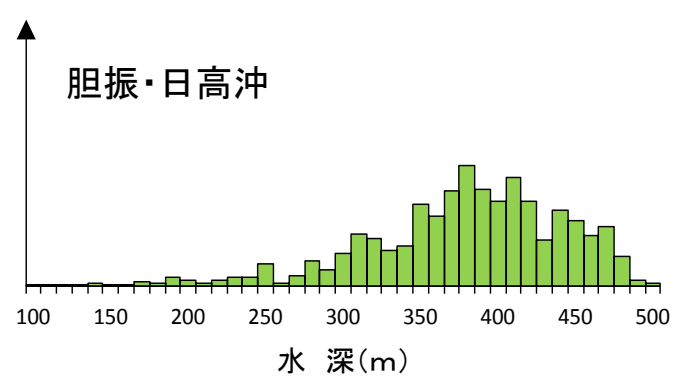
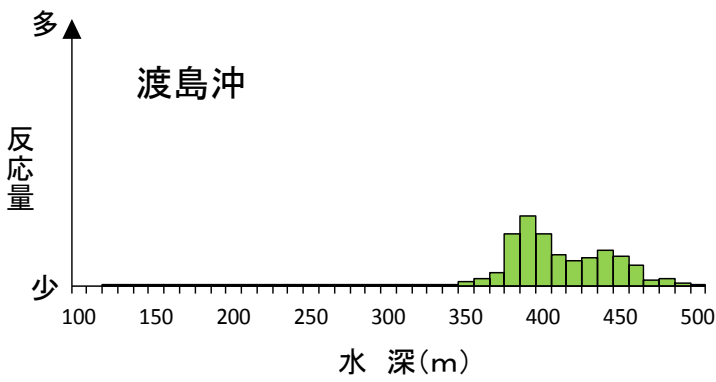


図4 水深別の平均魚探反応量 左:渡島沖(A~Fライン), 右:胆振・日高沖(G~Tライン)

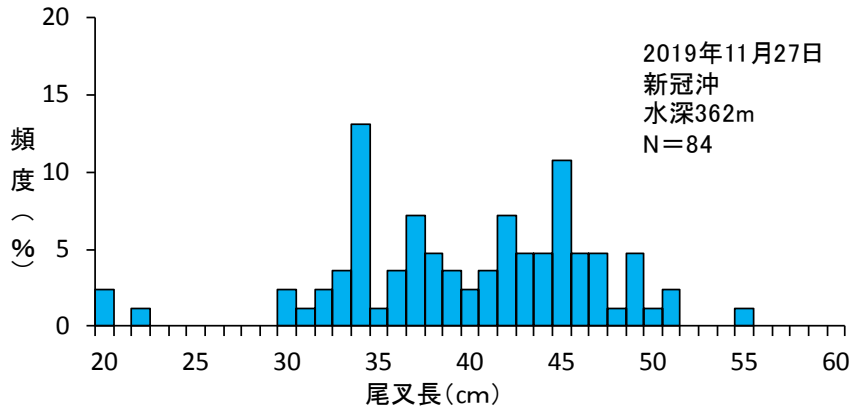


図5 トロールで漁獲されたスケトウダラの体長組成

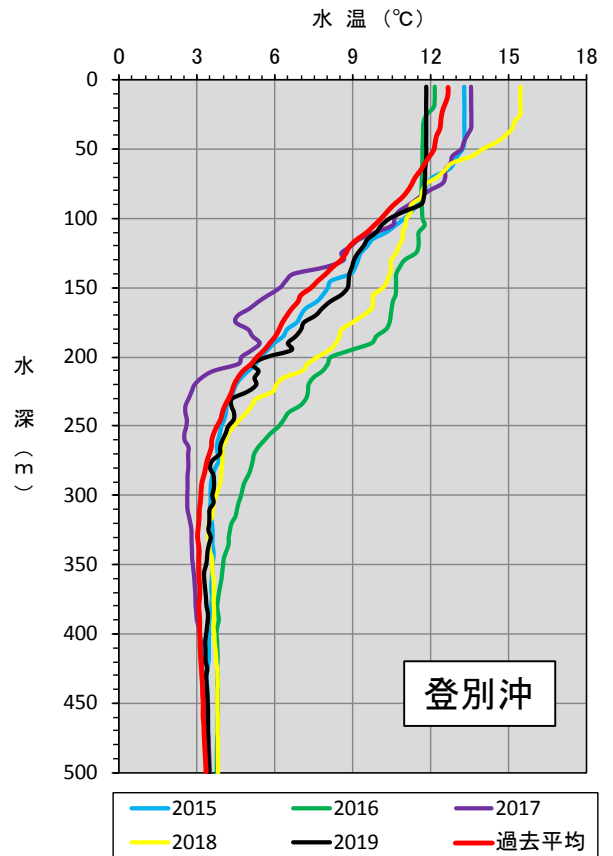
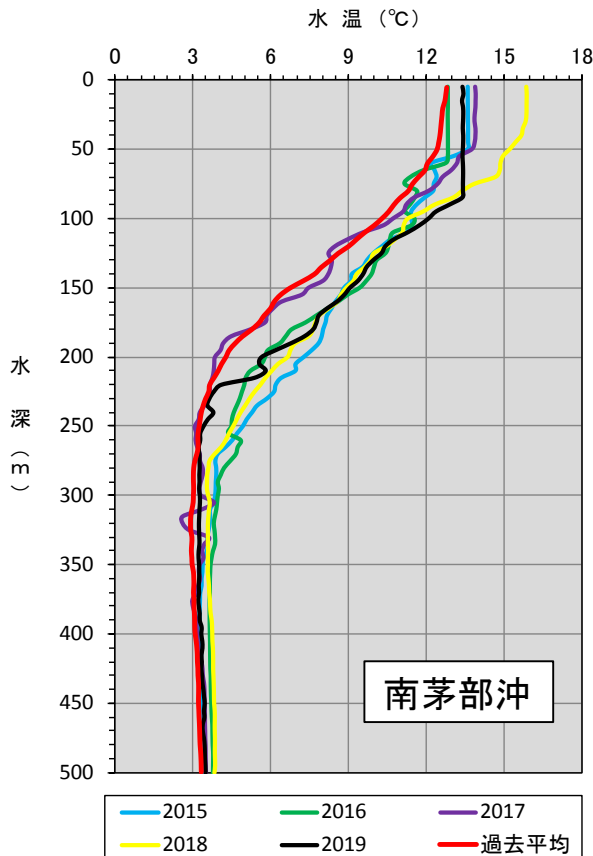


図6 11月中旬における水温の鉛直分布 左:南茅部沖(N42° ライン上), 右:登別沖(Hライン上) (過去平均:本調査における2002~2018年度のそれぞれの調査点の平均値)